

地名考

平成29年12月10日（日）10:00～11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

平成6年5月25日に「地名の探検隊」の表題で別子銅山に関係する地名を書きはじめた。最初の地名は東平であった。聞き覚えを忘れないように書き記しておこうとの思いからはじめた。やがて人の思いや行為には理由があり、その思いが土地に投影されたのが地名であると捉えるようになった。先人の土地への思いがどのように表現されてきたかを地理学的切り口から考察してきた。さらに考察しなければならぬ地名も数多く残しているが「地名考」として考察の跡を解説する。

2. 地名

地名とは、土地が表現する、あるいは土地の上に表現された、いろいろの様子に名付けられた名称である。土地や領域に関する各種情報の根幹であり、人との関係からいうと時代の層序の中で絶えず変化し、経過を温存する歴史的・文化的遺産である。

しかし、形がないばかりに忘れ去られたり、現在の生活の一部になっているので気に止められない存在である。

3. 地名は何を語るか

(1) どんな地形の所であるかを示す。(自然的)

遠登志、尻無川、河北山、洪水、打除、登り道、南小松原、久保田、河内、大江、江口、元塚、東須賀、中須賀、沢津、清滝、銚子の滝、渦井川、一本松、柳谷、馬の背、山根、河又、燧灘、要害、笹ヶ峰、瓶が森、岸の下、岸の上、浮島、星越、磯浦、大久保、

(2) どんな所に居住が営まれ、農耕が行われ、交通路が開かれ、市場が立ち、経済が発達していたか、それらの事情を伝える。(人為的)

銅山峰、足谷川、東平、端出場、惣開、新田、多喜浜、新須賀、角石原、角野、石ヶ休、レンガ坂、平形、口屋、立川中宿、宿

(3) 人々が生活に生じた信仰上、民俗上、慣行儀式上の様々な様式を知らせる。(精神的)

敷島、別子ライン、堺筋、金栄、チチ山とハハ山、大生院、八幡、一宮、若水、王子、星原、落神、松神子、船木、四阪島

(4) 行政の必要性から生じた官職、土地制度などの法制を表す。(政治的)

新居浜、東城、西の端、東新、立川山、別子山、大野山、種子川山、国領川、一の坪、本郷、郷、元船木、田所、中村、北内、西町と東町、生子山、金子山、岡崎、城下治良丸、西の土居

4. 別子銅山に関する地名を考察

- | | |
|--------|--------------|
| 1. 別子 | 17. レンガ坂 |
| 2. 銅山峰 | 18. 歓喜坑、歓東坑道 |
| 3. 足谷川 | 19. 積善・余慶 |
| 4. 東平 | 20. 高橋 |
| 5. 東延 | 21. 四阪島 |
| 6. 端出場 | 22. 平形 |

- | | |
|---------------------|-----------|
| 7. 惣開 | 23. 角野 |
| 8. 一の森 | 24. 山根 |
| 9. 立川山 | 25. 生子山 |
| 10. 遠登志 | 26. 石ケ休 |
| 11. 打除 | 27. 石ケ山丈 |
| 12. 国領川 | 28. 御代島 |
| 13. 昭和通り | 29. 磯浦 |
| 14. 三橋(共存橋、共栄橋、孝申橋) | 30. 瀬戸内海 |
| 15. 登り道 | 31. 別子ライン |
| 16. 星越 | 32. 王子 |
| 33. 呉木 | 39. シハス |
| 34. 角石原 | 40. 辻坂 |
| 35. 一本松 | 41. 喜三谷 |
| 36. 柳谷 | 42. 尾端 |
| 37. 馬の背 | 43. 大根戸 |
| 38. 前田 | 44. 日浦 |

01. 別子 上代に伊予の国の御村(新居・宇摩・周桑)を治めた郡司が景行天皇の第12皇子の武国凝別命(タケコリワケノミコ)の子孫であり御村別君(ミラノワケノミ)と称し、住民は別子(ワケノ)と呼んでいたが、後にはそれを音読みして別子(ベツシ)と呼ぶようになった。御村別君はこの地で鉱山経営をしていたので別子は上代新居郡東部の鉱山地帯の総称地名となった。

子孫には、加禰古乃別君(カネノワケノミ)、龍古別君(タツノワケノミ)、意伊古別君(オノノワケノミ)などがいる。

武国凝別命は天照皇大御神といっしょに御祭神として西条市の伊曾乃神社に祭られている。伊曾乃神社は大山祇神社とともに伊予の国の第一級の大社である。

現在の採鉱現場に対してかつての採鉱現場として、新旧の「旧」を冠した所が旧別子。東平と端出場が嶺北で大正・昭和期に連携して採鉱してきたのに対して、旧別子は嶺南で江戸期・明治期に採鉱してきた別子本舗、東延坑などのある区域を指す。

別子 旧別子案内の中の別子の由来では、「伝説によると七百有余年前の文治5年、近藤半之丞、藤原秀晴が近江国北泉から此の地へ来て、瓜生野町と称して開拓した。その子孫が各所に住居したので、「子を分けた山村」の意味で、後に別子山村と改めたと伝えている。」とある。明治45年に原稿をまとめた「別子山村郷土誌」からの引用である。

02. 銅山峰 銅の採れる峰。元は船窪の峰と呼ばれていた。銅山越えの直ぐ南に船窪と呼ばれる窪地があった所から命名。また西山から東山にかけては、船底のように窪んでいる吊り尾根であるところからそう呼んだとも言われている。

吊り尾根の名称で有名なのが、奥穂高岳と前穂高岳の間の吊り尾根である。双耳峰の鹿島槍ヶ岳にも北峰と南峰の間が吊り尾根であり、総称して鹿島槍ヶ岳と呼んでいる。

峰は「うね」であり、稜線を表す。徳島県の三嶺(ミヅ)、三つのうねが並んでいる山である。笹ヶ峰も主稜線の南に二重稜線が見られ、二つのうねである。二重稜線に挟まれて伊予池、土佐池がある。これらは葛籠淵の雨乞い信仰の日月の池に当たる。

峰は「むね」でもあり、家の棟の分水嶺の形態である。

日和佐初太郎の写真集「山・濱・島」の銅山峯の項の写真で、「銅山峯の標柱」の写真(昭

和31年)に銅山峯の表記がある。また、昭和30年代の広報映画では標高1324mと語られている。

角野町役場観光課の小冊子「別子ライン」(昭和32年)に龍川橋の項に「標高1300mの銅山山」と出ていて、銅山山の呼称もあった。

03. 足谷川 悪しき谷の川。鉱毒水等が流れて生き物が水中に生息しない利用できない悪い谷川。鉱毒等が流出するため、上流は銅山や鉱石のガレ場がなければならない。

足尾銅山も長年の採鉱、製錬で山が荒涼として、ようやく人の手で緑が回復しているが、悪しき尾根の所の意味に取れる。

端出場には、足谷川鉄橋が架かっていて、葦谷吊橋も架かっていた。『別子鉱山鉄道略史』の中の[別紙9]本線主要料程(踏切)表(昭和45年10月)の地図の中には、端出場～大山積神社の河川の名称は足谷川と記載されている。[別紙8]鉄道全線平面図には、打除の上流側には足谷川と記載されていて、角野小学校から下流側には国領川と記載されている。[別紙25]山根停車場平面図明治38年頃には、角野小学校前は国領川と記載されていて、生子橋が国領川と足谷川の境のようである。[別紙27]端出場停車場平面図(打除)明治38年頃には、芦谷川と記載されている。

足谷川は、遠登志から東平へ遡行してV字谷を刻む。今は鹿森ダム湖がつくられて、「落シ」と呼ばれた二段の滝は水没した。滝の水の印象の強さと、仲持が通行した街道が支流を本流と意識した。別子銅山絵図の仲持街道がメインに描かれ、足谷川もメインで描かれている。

遠登志から迂り坂の百雷峡までは人が入ることは困難である。この間の真ん中ころに大きな滝があり、この谷いっぱい水が落ちる音を轟かせている。登山道からほんの一瞬かいま見ることができるこの滝は、轟の滝の名にふさわしい滝である。

旧別子の川も足谷川で、支流が小足谷川である。旧別子を足谷山とも呼んだ。別子山区の銅山川(伊予川)に足谷橋が架かっていて、銅山川もかつては足谷川と呼ばれたようである。

足谷川 『別子鉱山鉄道略史補遺』の中に、足谷川を船石川と呼ばれていたとの記述がある。船木は、神功皇后が朝鮮に進軍する時に、船を修理する木を出したところ。船石の「石」は何に使ったのだろうか。碇に使用する石だろうか。

足谷川 人が入山するには悪い状態の谷川。冠山と平家平の南側の高知県の川に足谷川がある。大橋ダムの北に当たる。上州の赤沢谷悪谷、奥多摩の日野川小川谷悪谷は沢登りコースとしては有名。

銅山峰の南北の谷は、登山道が整備されていて安易に上れるが、V字谷で人を寄せ付けない谷川である。別子開坑の調査報告にも人跡未踏の地を進むとある。

足谷川 死者たちが向かう先は、海岸部では水平線の彼方に向かうと考えられ、陸地の奥に入り込み、山間部に居住するようになった人たちには、山が死者の向かう場所であった。各地にある霊山は、多くの場合死者を葬った葬地でもあった。悪谷、阿古谷、嫌谷といった地名は、葬地であった跡地ではないかともいわれている。(阿満利磨「仏教と日本人」ちくま新書)

住友史料館で、正徳三年(1713)の「予州宇摩郡別子御銅山覚書」を見せてもらうと、書き始めは「予州宇摩郡別子村之内足谷御銅山ハ、」となっていた。別子開坑23年後の記録であるが、「足谷」と呼ばれ、表記されていた。

別子山の集落が途絶えた、伊予川の上流は、死者が向かう場所として、別子山の民にその認識があったのだろうかと考えてしまう。山域を足谷山と呼ばれていて、そこに流れる川だから足谷川となる。

04. 東平 「とうなる」は、最初「当ノ鳴=とうのなる」と言われていたが、詰まって「とうなる」となり、東平の字が当てられた。

「当ノ鳴」の表記は、別子銅山24代支配人・鈴江伊右衛門が、役職中に新居浜の画工・尾崎梅芳に図写させた山林図[文化元年(1804)]に、銅山峯の西方・西山の麓に書かれている。柳田国男の「山村語彙」によると「当」は「峠」である。さて、どこの峠なのだろうか。

江戸時代の表記を明治時代で考えたことがあった。『当(とう)は、良鉱があったが湧水により採鉱に困難をきたした三角(ミスマ)の東延斜坑底から、排水の必要性により開削された第三通洞が地表に出た(当たった)ことを指している。鉱山の言葉で地中を掘って行って鉱脈を発見することを、鉱脈に当たると言う。宝物を掘り当てると言う。』

東は太陽が昇る方角で、若々しく勢いが増すことを意味する。これからの鉱山の隆盛を祈願して当てたと思われる。皇太子を東宮と呼び、住まいのある所を東宮御所と呼ぶ。

鳴るは、成るなど傾斜のなだらかな土地を表しており。第三通洞が地表に出て大マンブ、小マンブ(こまんぷ)を通り抜けたあたりは、V字谷を刻む足谷川にあっては、地すべり地形として相対的に成る地である。または、掘り出した岩石を捨てたズリが形成した平坦地による。

平(なる)の地名は、端出場の対岸に奥の平(おくのなる)が現存している。かつては、渡瀬の上部に大平(おおなる)があった。西条市加茂地区には大平(おおなる)河ヶ平(こうがなる)がある。銅山峰の嶺北の太平坑は「たいへいこう」と読む。

東平 寛文から元禄までの間に描かれた立川銅山古図に、東平小学校の跡地を「とう」と記載してある。「とう」の表記は「峠」の古語である「田尾越え」「田和越え」で「越え」が欠落した「田尾」「田和」から新地名である「峠」への移行期の名称である。「とう」でもって「東平」と読むのは間違いである。そもそも現地名の東平は、峠の平坦地をさしていた。更に間違っ「トウキビ」を栽培していたので「トウ」という説がある。「きり畑」として焼畑でトウキビ等を栽培していたことから出てきた説である。なお、新居郡宇摩郡天領二十九箇村明細帳の立川村に「きり畑8町三反七畝」が記載されている。東平への出作りと考えられる。

なお、松山市桑原に「淡路が峠」と記載して「アワジガートウ」と発音する。中萩小学校大永山分校があった「土の峠」も「ツチノートウ」と読む。

「たわ」から「とう」への音便変化

TAWA	
TOWA	先のAがOになり
TOA	Wが消え
TOU	後のAがUになる

東平 別子銅山21代支配人・鈴江伊右衛門が、役職中に新居浜画工・尾崎梅芳に図写させた山林図[文化元年(1804)3月作成]に、銅山峰の西方西山の麓に「当の鳴」と記載された地名が見受けられる。柳田国男編集の「山村語彙」によると「当=峠」「鳴=山中の平地。平、坦、均」

支配人・北脇治右衛門が作った山林図に「東の鳴」という地名がある。
(東平のぬくもり・加重忠義の話から)

東平 柳田国男「地名の研究」P24に、タワ・タオ・トウというのは山峯続きの中で、両側

の谷の最も深く入り込んで、嶺のそのために低く残ってる部分。山越えに便なる箇所。
山中で少しく平らな所をナル・ナラと呼ぶ。ナラスということ。

05. 東延 別子本山の鉱床が西から東に向かって富化する(延びる)実状にちなみ、さらに東に発展することを期待して命名した。

元禄の頃は、大根戸と呼ばれていた。根戸は坑内最低部。歛東間符から富鉱を求めた坑道が最も掘り下げられていたので、いい鉱脈を地表に投影しての命名。高品位の銅鉱石を大根戸鉱という。

北 冬 黒 玄武 水

西 秋 白 虎 金 中央 黄 土 東 春 青 龍 木

南 夏 赤 朱雀 火

06. 端出場 地中の銅鉱石が坑道内を運搬されて地表に出た所。坑道の端が地表に出た場所。

字面どうりの地名であり、それ以外に説明したものは見受けられない。意外と意味を説明したものが無いのが実状である。しかし、この単純な命名の裏に伝統的日本文化が由来しているとは、なかなか分からない。

地下の闇の中に長い年月横たわっていた銅鉱石が暗い坑道を通して、太陽の光りが降り注ぐ地表に運びだされ、銅鉱石が鉱石として光り輝く所。それは単なる石が鉱石と判明される時であり、石が鉱石として人間に有用な物質として認められ、その搬出に喝采を受ける時である。そこから鉄路で溶鉱炉に運ばれ紛れもなく貴金属として精製抽出される未来を称賛される瞬間である。

このことは、歌舞伎の役者が揚幕を出る瞬間の出端そのものである。端出場という地名は歌舞伎の「出端」によるものと考えられる。

出端の場所の出端場(ではば)では、音表示すると「出幅」となるおそれがある。「出端」を倒置して表示して「端出」とし端出場としたのではないか。また、「はではば」は、ハレとしての派手の場、すなわち派手場となる。地中の石が地表に出た場所は、太陽の光を受けて黄金に輝き、銅鉱石と言う有用物と認められるハレの場所に由来していると思われる。

開削された第三通洞が地表に出た(当たった)ことを指して命名された東平と一脈通じるものがある。鉱山らしく地中から地表への思考である。

「歌舞伎だけでなく、神楽、能、狂言など日本の伝統的な芸能は、共通して役者の出をことのほか大切にしている。それは日本芸能の特質と言ってもよいようである。

花道を出る役者は、幕揚げを切って出る。渥美清太郎氏は、幕揚げを”花道の末端から一室へ入る所に、境界として掛けてある暖簾幕の称”と記した。

この幕は役者が劇場空間(その意味では聖空間)への第一歩を踏み出すための境界幕なのであった。役者はこの境界を越す事により、全き変身を果たし、その瞬間から劇の中の人物として動き出す。揚幕の中で待機している役者が入れる鋭い気合いは、彼の変身の決意であり、完成を意味している。

能の幕揚げを一種の境界を規定して、鏡の間から橋がかりへ出る時のことを、人間の出生にたとえた口伝がある。”楽屋入りをして、物の色めも見えざる所は、人の胎内に宿る形也。幕を打ち上げ出づる風情、これ人間の生るる形なり”(八帖花伝書)とある。母の胎内にじっと籠もっていた魂が、いま人間となって誕生するところだと言うのである。狂言も同様で、特に”幕ばなれ”と名づけて、出の演技を重視した。」

端出場の地名は、現在の打除をさしていた。石ヶ山丈と端出場(打除)の間に索道が架

かっていた時である。明治35年製作の住友金属鉱山の6千分の1の地形図では、現在、端出場と呼んでいるあたりは向平（むかいなる？）と命名されている。

仲持道から見て向こう（対岸）にある平坦地であった。岩盤に当たり蛇行した足谷川が流れを変えて運搬した土砂を堆積して形成したポイントバーの緩斜面が広がったところであった。やがて端出場の機能拠点が打除から向平に移行すると向平が端出場と呼ばれる。

別子銅山記念館蔵の明治18年の土木課の考課状の中に「ハテバ」の土地表記があることが、「山村文化16号」で発表されているが、最果ての土地の意味らしいが場所が特定されていない。端出場より奥地に別子銅山の本鉱があるので地の果てではない。立川村もさらに南に広がっている。足谷川の左岸、鹿森社宅下を類推しているが、なぜ対岸なのか疑問が残る。

明治22年12月14日の鉱業用軽便鉄道布設願いに対する、鉄道布設許可命令書には下部鉄道の区間が「角野村大字立川山字端出場より新居浜村字惣開に至り」と字名としてすでに端出場が出てくる。端出場駐車場の図面は、今の打除である。

端出場 端出を再考する。日本語をさかのぼると新たな発見がある。

自己の存在領域と領域外とに関する認識として、奥と辺がある。奥は大事な所、価値ある所で、辺は端の所、価値の薄い所である。端は地中に内在していた鉱床の価値あるものに対して価値の無いものとなる。鉱床のある奥に対しての端は、地中では地表である。第四通道で言うと、鉱床が奥で、坑道口が端である。

出（イヅ）は内と外とに二分した中で、内にある外からは見えないものが、あたかも存在しないかのように思われていたのが、形をとって外から見えるようになる意である。地中に内在していた鉱床の銅鉱石が第四通道を通過して外に、地表に出ることである。隠れた場所から広い場所に姿を現す意であり、出現する意である。隠れた存在が姿を外に見せる意である。

端出とは鉱床と地表とを巧みに言い当てた重複用語である。

（「日本語をさかのぼる」大野晋・岩波新書参照）

「不思議な漢字」志田唯史・文春文庫によると、端午の節句の「午」は、十二支の「午」ではなく、同音の「五」が書き換えられたものである。中国の古書に、もともとは「仲夏の端五」であって「端」は「始」の意味だから五月の最初の五日のことをいうのに、五を午と書いて間違っているとある。端出場は、出た端ではなく、始めて、または初めて出た場所。これが甲子園なら初出場で感激ものである。

端出場 端出には「騒がしい」との意味がある。住友鉱山鉄道終点駅の端出場駅近くには、猿飛び峡の別子ライン第二の関門で川幅を絞り込まれた箇所があり、水音が大きくなる。現在、端出場と呼ばれている石積みと端出場水力発電所の間には、ナイヤガラと呼ばれる滝があり、轟いている。川の水がひときは騒がしい場所の意味だろうか。

端出場 旧別子に「高橋」の地名があり、高い尾根の端が谷に落ちる端っこである。尾根の端が出っぱった場所である。V字谷を形成している足谷川の中で、石ヶ山丈の南から下りて打除社宅跡をとおり打除に続く尾根は顕著な尾根である。

東平の尾端も尾根の端なので、同じ語源である。

端出場 足谷川橋梁も当初は端出場鉄橋と呼んでいた。ハーコート社の図面の裏には毛筆で「端出場鉄橋」と書かれている。また、小川東吾の明治26年の見積書も「端出場鉄橋」と書かれている。県への申請書類では足谷川に架かる橋とした方が分かりやすい理由からか谷川橋梁と表記した。かつて端出場と呼ばれた土地は打除と呼ばれるようになり、打除鉄橋とも呼ばれるようになった。マイントピア別子の整備での施設説明板は「打除鉄橋」となっている。

中尾トンネルも当初は端出場隧道と呼んでいた。昭和25年の写図には「端出場隧道」と書かれている。中尾の尾根の下をくぐるので中尾トンネルと呼ばれるようになった。

端出場の中心地が端出場鉄橋を渡り、端出場隧道を潜り抜けたトンネルの北側の向原は、端出場隧道北口にあたり、そこも端出場の呼称になったと考えられる。端出場の地名が橋を渡り、トンネルをくぐって移動してきた。

別子鉱山鉄道略史補遺の中にある住友鉱山鉄道の愛媛県への申請書(コピー)には、角野大字立川字端出場と有るのを確認する。

別子鉱山鉄道端出場鉄橋、別子鉱山鉄道端出場隧道は平成21年8月7日に国の登録有形文化財に登録された。

端出場 山形県の出羽は、「いずは」と言っていた。入峰して出峰する場所である。入り峰は、一度死ぬことであり、出峰は再生して生まれることである。出羽は出場か。「端-イズハ」は、山から出てくるところの山の端。

端出場 ハシ、ハチ、ハツ、ハテ、は語源を同じくする土地の端または境を示す。「ハ・デ・バ」は「ハテ・バ」で漢字表記なら「端場」となり、土地の端を示す。地形から尾根の端。

07. 惣開 清水総右衛門が新田開発した所を総右衛門新開と呼んでいた。後に縮めて総開となった。通信省が郵便局名を惣開(総=惣)としてから惣開と書くようになったと言われている。住友化学歴史資料館の横に立っている總開之記という碑に刻まれている。

總開之記

伊豫の國別子鑛山の分店はもと新居濱本村にあり。嘉永年間其の店長清水總右衛門といふ。課餘好く釣遊を為す。一日見る處あり、洲渚卑湿の地を開墾して四町七段三畝の良田を得たり。乃余に就きて其の名を需む。余曰く求めずして名あり總右衛門新開是なりと、後約して總開といふ。且つ是地や南鑛山を負ひ、北海灣に臨み最舟車に便なり。是を以て明治十六年溶鑛試験所を此に設け二十二年分店を此に移し開明の新機器を具へて溶鑛改良の試験を為し遂に今日の良果を得たり。曾本年別子山創業の二百年に際し復此に其の慶事を舉ぐ。因て窃に謂へらく總開の二字は初め偶然に発すると雖も一は鑛山の全事業を總合するの兆をなし、一は溶鑛の新機器を開成するの基と為す、然らば則總開の名果たして偶然ならざるものあり。亦奇ならずや、抑又總右衛門主家に盡すの誠心顯晦を以て變ぜず、是今日の良謀を遣ししにあらざるなきを得むや。

明治二十三年五月 二百年祭の日

住友家の總理従六位廣瀬幸平記す

泥舟逸人精一書

惣開 昭和3年7月25日の「郷土研究11号」に、「惣開というのは、清水総右衛門が開いたから名づけたのであると記しているが、惣開という名は昔からあった。宝暦一四年以後の新居濱惣改帳にのっており、また文政一二年の惣改帳には惣開畑の肩に「寛文九西より享保一二年末これを開く」と掲載されている。宝暦14年(1764)は、嘉永年間(1848~1853)よりも90年ほど前に惣開の地名があったことになる。郷土史談69号(S. 56年4月)に「惣開の地名について」でこの内容の報告がある。

惣開 別子鉱業所が森林計画準備等のために明治32年から明治40年まで測量して作成した6000分の1の地図に字界図を重ねて読図する。磯浦海岸の低い浜堤には松林が形成され、その先は御代島に続く州となる。浜堤背面の水田が地上げされ惣開小学校、惣開グラウンドが整備されている。内陸には更に2つの浜堤が伸びている。別子鉱山鉄道の線路は、

浜堤の上に敷かれている。また、新田の集落が浜堤の微高地の上に形成されている。

別子鉱山鉄道が敷設されている浜堤とその海側が、西惣開、東惣開であり、広瀬幸平が惣開の記碑で書いている清水総右衛門が干拓した新田面積は4町7段3畝で、東惣開の面積は約4.5町であるので、清水総右衛門が干拓したのは「東惣開」である。「西惣開」は清水総右衛門が干拓した嘉永年間より90年前の宝暦14年の新居浜浦惣改帳の記録に出てくる「惣開」は、「西惣開」と「寄合新田の一部」である。

新居浜浦惣改帳の記録は、

寛文3年～12年	寄合新田	1町6反7畝9歩	1.679町
寛文9年～享保12年	惣開畑	14町4畝9歩	14.049町
	合計		15.722町

小字図

寄合新田	8.6町
西惣開	6.9町
合計	15.5町

「若宮のふるさと誌」説だと小字の東惣開・西惣開の面積11.4町は新居浜浦惣改帳面積14.049町より2.649町も狭い。新居浜浦惣改帳の寄合新田と惣開面積15.722町が、小字図の寄合新田と惣開面積15.5町とほぼ同じである。惣開の地名は、「65年間にわたり寄合で開いた、総がかりで開いた」考えられるので、寄合新田と西惣開を併せて考えると意味合いも合致する。

また、新居浜郷土史談69号に、「惣開の地名について」で、明治5年以後の土地制度で惣右衛門新田が公簿に680番地、681番地と出ている。そして、昭和2年に東惣開に編入されている。

惣開

中世における村は「惣村」と呼ばれる。外敵から自分たちを守るために住居を耕作地から離して一箇所にまとめ、自衛したり、水利や道路整備を共同で当てる体制を確立する。近世に移行するにあたって「天下統一」のもとに、惣村の自治能力を弱めるために、刀狩り、検地を行い支配体制の中に組み込んで、惣村に代わって近代的に村落共同体が出来た。惣村から村落共同体としての集落に発展していくことから、「惣開」は清水総右衛門が開いたからでないことは自明のことであるが、新田開発では、皆で開いたので惣開とするのは、惣村を開いていくという歴史的発展形態の繰り返しであり、能動的行為からの命名である。

08. 一ノ森 山頂に大山積神社の社殿前広場が造られ東平地区の山神祭の会場として親しまれた場所である。下から順にある山として一ノ森、二ノ森、三ノ森と命名され、稜線は大山を経て西山に至る。

朝鮮語のモリは山であり、森の字を当てた。古代において朝鮮半島との交流があったことを示す。堂ヶ森、黒森、高森、三方ヶ森、四辻ノ森、五代ヶ森、五葉ヶ森、明神ヶ森、経座ヶ森、柱ヶ森、餓鬼ヶ森などの山名がある。

古代神話も日本海を取り巻く地域に共通性があり一つの文化圏を形成していた。山を森という語源に2とうりある。

朝鮮語の頭をいう（モリ）が伝播したもの。古代朝鮮語で山を（モイ）と称したものが日本に伝えられた。

アイヌ語載m o - r i（モリ=小さな一山）いわゆる森とは別に盛り上がった地形をいう。祖霊をまつるモリという場所があった。恐らく朝鮮語の墓と同じモイであっただろう。禁断のおごそかな、またおそろしい場所として森、杜の字が当てられる。次に祖霊分体の移動箇所が森と呼ばれ、祖霊が隠りそうな奥深い山々に畏敬の念を込めて森が伝播していく。

石鎚山は日本最古を誇る山岳修験道場であるが、この山の蔵王権現は、初め里よりの瓶ヶ森に大和から勧進されたが、828年に現在地である弥山に移された記録がある。恐らく、最初の聖地であるが故に瓶ヶ森にモリがつけられたらしい。

アイヌ語の小さい山のモリだとすれば、北海道に森の山がほとんど残されていないところに弱さがある。

（谷有二著 「日本山岳伝承の謎」から）

※ 森 八ヶ岳のふもとに「美しの森」と呼ばれる小高い山がある。山を森といった名残かと「ことばの歳時記」で金田一晴彦が書いている。

一ノ森 東平の貯鋳庫がマチュピチュの遺跡の石積に似ているので東洋のマチュピチュと呼ばれるが、地形も空中都市に類似している。一ノ森—小学校跡—二ノ森の続きが、マイナピチュ（若い峰）—神殿跡—マチュピチュ（古い峰）にあたる。両側をえぐる小女郎川と足谷川のV字谷も相対する。呉木の社宅跡のテラス、東平の社宅跡、病院跡、接待館跡、貯鋳倉庫跡のテラスは、トウモロコシ畑の段畑テラスに相当する。

09. 立川山 龍古別君(タツノワケミ)が、代々立川山の産土神として龍河神社に祭られている。龍河の河は訓読みの古であり、龍古が龍河である。後に立川の字が当てられた。立川山の「山」は山頂を指すのではなく、地域を示す。山域のことである。山とは反対に海にちなんだ島にも地域を意味する使い方があり。漢字の「島」は、渡り鳥がやすむ海の小さな山を意味する。これに対して和語で「しま」というのは一つの限られた地域の意味である。秩父地方などでは、山や谷によって区切られた集落のことを、その田畑や森までを含めた独立の土地という意味で「しま」と呼んでいる。

ある勢力圏や縄張を「しま」と使う例が一部の人たちにある。

島が水面に出た土地の区域を示しているのと、山が山並み等で囲われた窪んだ土地の区域を示しているのは、凸と凹の関係にあり、対になっている。

種子川山、大永山、大野山、別子山などの地名がある。

なお、龍河神社は、「りゅうかわじんじゃ」と読む。

※ 島は渡り鳥が海面に出た土地に降り立って休憩する所。「島」の字は海面から突出した山に鳥が取りついているように見える。

10. 遠登志 鹿森ダムが建設されて湖に沈んでしまったが、足谷川が小女郎川が合流するとき、二段の滝となって落ちていた。水が落ちる様から「落し」と呼び「遠登志」の字を当てた。変体仮名の「を・と・し」の字である。ちなみに、「於登志」と書かれたのは、変体仮名の「お・と・し」の字である。

ちなみに、川の本流と支流の決め方にはいろいろな要素を考えるが、大きくは合流地点で水を受ける側が本流で、水が落ちていく側が支流である。しかし、生子橋から遠登志を経て東平に遡行する川筋を心理的・生活上から本流として考えていた。

遠登志橋 明治38年完成のドイツ人設計による鋼鉄アーチ橋で、別子鉱業所土木課が4,198円20銭で建設し、角野村に寄付した。長さ48.25m 幅2.4m 高さ23.2m。坑内排水が川に混入するのを防ぐため、橋の上流側には、東平から海岸まで続く坑水路も設置された。現存する鋼鉄アーチ橋では最古級のものである。支柱の鋼材はドイツのBURBACH製。赤い色が四季の色合いの中に映えている。

老朽化したので、平成5年3月に改修した。下部にアーチ型の鉄橋を残しその上30cmに吊橋（長さ53.0m 幅2.0m 主塔高7.0m）を造り二重構造にして保存している。

日本橋梁建設協会が公共の橋の歴史をまとめた「日本の橋—鉄の橋百年のあゆみ」によると、現存するわが国最古の鋼鉄アーチ橋は兵庫県に明治17年ごろに造られ、長さ16mと18m。長さ50m近い場合は、鉄骨と橋の両横に組み合わせるトラスト橋がほとんど。明治43年になって初めて、愛知県に長さ72mのアーチ橋が完成している。

平成17年12月26日に国の登録有形文化財に登録された。

11. 打除 川が山に打ち当たって、その山を除けて迂回したところから打除の命名となったとS字の屈曲から考えられる。しかし、当初は打除の地が端出場と呼ばれていた。

12. 国領川 保国寺領の略字と天領の中の川すなわち国領川の2説ある。

伊予温故録（宮脇道赫著）の中に「泉川村にあり。中野村保国寺縁起に日く、始め一城義次本領一所之地を割き、仏通禅師朝昏之具に備う（中略）故に保国寺領と称す。歌詩和峠西南地是之。いま俗略し国領という」合田正良氏は、「別子銅山の経営の都合から、関連地域の東角野村、西角野村、種子川村、新須賀村など西条藩と領地替えをして天領とした。当時、新須賀川と呼ばれていた今の国領川のうち川幅の広い代表的な部分が、天領すなわち国領の真ん中を貫流していたところから、元禄15年に国領川と改めたと」いう。

国領川は、河口から別子ラインの関門の生子橋までの約6km。上流は小女郎川と名称を変える。国領の地名は、国道11号線の国領大橋の東側の泉川・船木地区にとどめている。

新居郡は、西条藩、小松藩、天領に分かれている。国領川は上流まで含めて天領の立川山村、大永山村、東角野村、西角野村、新須賀村と西条藩（西条の国）の上泉川村、下泉川村、庄内村、郷村、宇高村、沢津村を貫流しており、西条の国と天領を流れている川として国領川と呼んだのではないだろうか。または、中世の開発地名ではないだろうか。荘園の領主が国府などの公の圧力を避けるため、荘園を権力者に寄進する。権力者は本家・本所となり荘園領主は領家となる。領家の地として「国領」が命名された。「国」が今のところ説明できない。

伊能忠敬図では、国領川を立川と表記している。

13. 昭和通り 鷺尾勘解治が住友別子工業所長就任直後の調査で、銅鉱石の命脈が残り17年で尽きることが判明して、取り組んだ都市計画事業で、昭和橋から新高橋西詰まで。当初は道路幅8間（約14.4m）を計画したが、広すぎるので半分の間（約7.2m）にとの意見があり、中をとって6間（約10.8m）になった。昭和6年に建設した道路であるので昭和通りの呼称となる。竣工は6月10日、開通は7月5日。昭和3年（1928）に東京市長の後藤新平は、東京復興計画で道路幅100mの昭和通りを計画したが実現していない。現在、東京・銀座通りの海岸側の道路も昭和通りである。

14. 三橋 新居浜市の三橋は、共栄橋、共存橋、申孝橋の3つである。

共存橋は、若水町のつづら淵から流れる小川に架かり、共栄橋は、尻無川に架かっている。2つで共存共栄となる。別子鉱業所所長の鷺尾勘解治の「企業は労働者・地方の繁栄と

ともにその利を同じくして栄える」との持論からの命名である。

申孝橋は、西原町のスーパーマーケット・バリューの足下の水路の上に架かっている申孝橋は「徳をたつこと申孝なり」からきている。申孝とは、正しく清らかな心、私心の無いことを意味している。

3つの橋は、昭和5、6年ころ「町の発展は都市計画から」と昭和通りと星越から中須賀町までに幹線道路を建設した時に架けられた。しかし、昭和通りに架けられた橋に昭和橋もあるので、昭和通りにある橋は、共栄橋、共存橋、申孝橋、昭和橋の4つとなる。

15. 登り道 別子銅山のある南の山に向かって登り勾配の道。その道に沿って形成された町並みからの自然命名。南が四国山地で北が瀬戸内海であるので、北から南への登り勾配の地形断面からきている。上昇する方が下降する方より縁起がいいので下り道とはならなかった。登り道の地名は、西条市にも同様にある
16. 星越 潮の干満で干潮の時に渡れる所。干し越えの所。星越の地名は、星越トンネル北側の社宅に地名としてあった。今の星越町はかつては山田と呼ばれていたが、角野の山田と同じであり混同するので、星越トンネル北側の社宅地名の星越が、小さな峠を越えて命名された。明治32年～40年に別子鉱業所が作成した1/6000の地形図に星越の地名がある。レンガ坂を下ったあたりである。新田集落の微高地と磯浦・原地の砂堆との間の後背湿地に海水が金子川の河口あたりから浸水していたころの名残が地名の起源である。
別子病院の裏手のグラウンド名が、住友金属鉱山星越グラウンドと昔の地名を伝えている。
新居浜選鉱場がある山を星越山と呼んでいるが、初めのうちは前山の呼称がある。星越山は元は王子山で、惣開小学校の上に文政2年正月に王子権現をお祭りした。今も手洗い石とお塚がある。ここから王子町の町名が由来している。
郷土史談22号(S.52年5月)に、山田川の下流の王子川は元は「前川」であったとの報告がある。
17. レンガ坂 星越町の切り通しから、県道壬生川・新居浜・野田線に下る磯浦町と王子町の町境の県道金子・中萩停車場線には、惣開に建設していた煉瓦建造物のレンガが敷き詰められている。今はアスファルトがオーバーレーンされていて確認できない。住友社員が通勤する時に、そのレンガを踏み締めて、かつての教訓を身をもって覚えておくためである。
18. 歓喜坑 元禄3年に実地踏査に出かけた吉岡鉱山の支配人・田向重右衛門たちが、試掘して良質の銅鉱床を発見した時に相擁して歓喜し、前途を祝して歓喜坑と命名したと言われている。
しかし、この時点では大鉱床であるかどうかは分からないので、単に喜んでの命名ではなく「前途を祝した」とあるように、33年間の稼行でほぼ掘尽くした吉岡鉱山に代わるべき鉱床であって欲しいとの願いを持っていたと思われる。さまざまな障害を除き多くの現実的な福を得させるという仏教の守護神の歓喜天(かんぎてん)に願いを掛けをして歓喜坑と命名したのではないだろうか。
歓喜天は人身象頭の姿で二象が抱擁する形を表しているので「相擁して歓喜し」とあるように、抱き合う福神の形態を真似た喜びの表現を記述したとも考えられる。
天王山(京都府大山崎町)の中腹にある山崎聖天観音寺に、元禄10年に三代友信が基石を入れて高さ3メートルにも及ぶ青銅の大灯籠を寄進したのは、商売繁盛の信仰を集めていた大聖歓喜双身天王(聖天)への経営伸展の願いだけではない。歓喜天にあやかって命名した歓喜坑のある別子銅山から産出される銅が、元禄5年は360トン、元禄8年は685トン、元禄10年は1,350トンと順調に増加したことへのお礼と、更なる発展の願いであろうと考える。その願いが翌年の元禄11年には、1,520トンという明治以前の最高を記録し、当時の世界記録を作った。

歛東坑 歛喜坑に続く2番目の坑道で、歛喜坑の東側の坑道としての命名であるが、これも歛喜天に祈った歛喜坑に続く歛喜東坑（かんきひがしこう）である。別子大鉱床の南側の富鉱帯に続く坑道であり、その先には西洋の近代技術を駆使しなければ採鉱できなかった富鉱の三角（みすま）がある。三角から斜坑で地表に至って東延に続く。

歛喜天の福が「予州別子山ノ鉱業ハ、万世不朽ノ財本ニシテ、斯業ノ盛衰ハ我一家ノ興廢ニ関シ、重且大ナル他ニ比スベキモノナシ」と住友家法第二条で住友家の基盤と位置づけるものであった。

19. 積善・余慶 中国古典である「四書五経」の五経の一つである易経にある「積善の家には必ず余慶あり、積不善の家には必ず余殃あり」の積善と余慶からの命名である。善い行いをたくさん積んだ家の一族や子孫には必ず善い報がある。しかし、悪いことをたくさんした家の一族や子孫には必ず悪行の報いがある。五木寛之「人生の目的」を読んでいて発見する。

住友家の繁栄や四阪島で言われたような「一島一家」に見られるように別子銅山に働く人たちや、その地域に住む人たちを家族とみなし、また、次の代に働く人たち等を子孫とした考えである。儒学の考えで家中心の考えが根底に流れている。この元の考えは、仏教発祥の地の古代インドであり、善因善果、悪因悪果である。個人主義の古代インドでは個人に報われる考えであるが、中国では精神的伝統と社会的慣習の中で、家に報われるように変化して、中国版の考えが日本に入ってきている。

20. 高橋 高橋はタカバシと読む。橋が架かっていたのではなく、橋は端であり、尾根の端の意味。高い尾根の端が谷に落ちる端っこ。

21. 四阪島 美ノ島、家ノ島、明神島、鼠島の4つの無人島の総称である。海上の行政境界域に浮かんでいた四つの島。宮窪町の境にある四島。境の島である。元は四坂島と書いていた。今でも四坂島と表示の地図を見ることがある。

坂は「五十の坂を越す」のようにものごとの境として使う用例がある。「境＝サカイ」が「サカ」に訛ったかも知れない。

阪一阪の字は元は坂を書いていた。この変更には大阪市の「坂から阪への」変更の影響と考える。坂の字は分解すると「土に反る」となり死んで土に葬られ土に帰るとなるので、忌み嫌って、土を「こごとへん」に変える。「こごとへん」は「阜」の略であり、高く盛り上がった地形を現し、隆盛につながる。

無人島から有人島へ変わり、四阪島製錬所の隆盛の縁起を考えての変更であったと思われる。兵庫県の生野銀山が死野銀山から名称変更したのと同じ考えである。

- 四阪島 四つの村の境の島。

別子開坑二百五十年史話の408ページに「四阪島は愛媛県越智郡宮窪村大字友浦に属し、北緯34度6分に位置す。三ノ島、家ノ島、明神島、鼠島の四つの小島より成れるため四阪島と称し、付近四個村の共有に属し、古来燧灘中の漁場に利用され-----。」とある。

四つの小島だから四阪島と呼称したとあるが、四個村の共有であるのは、広い海原に突出した境界杭そのものであるから共有としたのである。阪はサカイが訛ってサカとなったのである。サカイの島。四つの村の界の島となる。

今でもサワラ漁の好漁場であり、昔から燧灘の漁場として利用されていたので近隣の村では四つ群島を境界としたのである。この海域を共同漁場としたので、四島を共有としたと考える。

四村と四島が数字的に同じなので、四つの島という自然形態が顕在化し知覚され、四村

という人為形態が潜在化して忘れられた。

22. 平形 山中で石垣を築き平坦地を造成することを地形(キョウ)と呼び、大地形の地名も残っている。平形は平坦地の地形で、国領川の流路が右岸に偏り庄内と新須賀の間には堤はなく、発達した自然堤防が霞堤のオーバーフロー部になっていた。その自然堤防上に築堤して社宅用地を造成した所。市道から平形社宅への進入路の間は、盛り土しなかった箇所として窪地になっていて松の大木が林立していた。今は埋め立てられて分からないが、平形町の北端の河川敷への進入路の北側に窪地が残る。

※ 霞堤は不連続堤で、開いた箇所から増水時にはオーバーフローする。国領川右岸には、平形橋と城下橋の間に痕跡の堤が2箇所確認できる。

23. 角野 棲み野と書かれていた。古代人々が住みはじめた場所に由来か。洪水の恐れもなく、水の便利のいい場所は、湿潤な沖積平野でなく少し高い場所。扇状地性の緩傾斜地となる。傾斜地は水はけがよく雑木林や原野を形成し農耕以前の食料の宝庫である。

24. 山根 山の根。山の裾野。
山頂に20.145mのレンガの煙突を建て、約145mの煙道を設けて山の下に湿式製錬所を建設した山根製錬所は、まさに山根にある製錬所である。

山根製錬所は、これまで廃棄していた低品位鉱の活用、含銅硫化鉄鉱の硫黄と鉄の活用として硫酸製造や製鉄を試みた最先端技術を応用した工場であった。製鉄に至っては、官営の八幡製鉄所に先立つこと7年であった。我が国の近代化が鉱山業から重化学工業へ発展していく歴史的過程を物語る記念碑である。

山根市民グラウンド、山根公園に名を留め、国領川の西にも山根町、山根大通がある。

25. 生子山 生こ子山(おいこやま)と呼んでいたのを音読みして生子山(しょうじやま)と呼んだ。後年、麓に政治を司る役所ができて庄司山とも書かれた。戯れ書きして障子山と書かれていたこともある。

武国凝別命の子孫に意伊古乃別君(おいこのわけぎみ)があり、川口の殿垣(本新田の社日宮があるあたり)に館を設けて東新地方を開発した。そして新居高神社に祀られている。古くは、「意伊古」に由来すると考えられる。

26. 石ヶ休 山の中での銅山関係の物資の運搬は人力によっていた。背負ったまま休むために石垣を築いて荷物をそこに載せて、背負ったまま休む場所を作った。清滝と川又の稜線部に石ヶ休の地名が、明治35年製作の住友金属鉱山の地図にある。

遠登志から東平の登山道で大休みの上部で近道と遠道に別れた遠道にそれらしい石垣がある。

また、索道の中間地のレンガ小屋前の休憩所も石垣の上にベンチがある。この石垣は石ヶ休の石垣ではないか。

石見銀山の石銀集落から佐毘売山(サヒメヤマ)神社への運搬路の中間に「米噛み岩」がある。ちょうど荷物を背負った時に、もたれて荷物を置ける岩である。荷物を岩にのせて休憩する時に米を噛んで腹を満たしたところからの命名である。「石ヶ休」と同じ。

27. 石ヶ山丈 愛媛県行政文書「鉄軌索道」所有の文書には、明治21年1月28日の「鉱業用鉄道敷設願」では「石ヶ三丈」の表記がある。広瀬亘が出したこの「鉱業用鉄道敷設願」では当初「石ヶ山丈」と書いてあったのを、上から紙を貼り付けて「三」に書き直している。その後、明治25年4月20日の「(上部鉄道布設工事着手)御届」まで、県行政文書所

収文書のほとんどの表記が「石ケ三丈」の表記がある。住友内部でも明治26年11月5日の、重任支局宛ての「鉄道布設経費精帳」では「石ケ三丈」の表記ではある。

県行政文書の明治26年8月27日の久保盛明から愛媛県知事宛ての「(上部鉄道布設工事完成)御届」では、「石ケ山丈」と書かれ、それを受けた明治27年5月16日の県知事による開業許可でも「石ケ山丈」と書かれていたようである。

書かれたようであるというのは、「別子鉱山鉄道略史補遺」に載せられている開業許可の通知は写しで、肝心の県行政文書の開業許可の決裁文書では「石ケ丈」と書かれていて「山」あるいは「三」が抜けていて、確認できない状況にある。「別子鉱山鉄道略史補遺」に載せられている開業許可の通知は写しからして、「石ケ山丈」であった可能性が高い。

石ケ山丈 別子鉱山鉄道略史補遺の中に、「石ケ三丈」の表記がある。丈は長さの単位の尺の十倍の単位である。約3.3mに当たる。三丈はほぼ10mである。長さ10mの石の何かがあるのか。ケは「箇」の略字であるが、音は「カ」で「ガ」と濁音にはならない。「ガの音」に当たるは字が「崖」なら、石の崖の高さ、深さが10mもある所か。

石ケ山丈 別子開坑二百五十年史話の141ページでは、元禄15年の新道開設の中で、石ケ休場を石ケ山丈と読み替えている。「山丈」はなにの意味か。

石ケ山丈 谷有二の「山の名前の謎解き辞典」(青春文庫)に、「ジョウ」「ヤマ」は接尾語で「山」の意味。地形用語の「ジョウ」は崖の意味となる。伊豆に「発端丈山」がある。

丈が山の意味だと、石ケ山丈は石ケ山山となって不自然である。丈が崖の意味だと、石ケ山丈は「石ケ山の崖」となる。石ケ山の崖、石ケ山の崩れなら石ケ山丈の上に見えるピークが石ケ山か。上部鉄道は足谷川が掘り込んだV字谷なので、石ケ山丈はまさに崖である。

炭が燃えきって灰になることを「ジョウになる」という。能でいう翁を「尉^{しょう}」というところからである。翁は黒髪が白髪に変わっていく。黒い炭が白い灰になる。焼き固まった炭が燃えて灰となり崩れるので、地形用語で「ジョウ」が崩落地形、崖の意味を伴う。「ジョウ」の音に「丈」「城」の漢字を当てた。

28. 御代島 神の島で神与島と書いていたが、御代島に転じたと言われている。御代島は満潮時は海面下に沈むが、干潮時には砂州が陸地に繋がる陸繋島の形成中の地形であったが、埋め立てて陸続きになった。人工陸繋島と呼ばれている。

干潮時には砂州が現れて渡渉できる島なので、海水を押し分けて陸地が現れる現象から「水押(ミヅ)の島」が縮まって「みよしま」となった。水押(ミヅ)とは、船の舳先の船底から斜めに立ち上がって取りついている先端の部材で、船の推進で水を押し開く部分の名称。

海中から渡渉の道が現れる現象を神の行為と考えと思われる。

郷土史談22号(S.52年5月)の稲見馬次郎の「前川」の報告の地図では「州首」と記載されている。

29. 磯浦 正徳6年に名古屋呂田畑松林に隣接して名古屋呂新田塩田があった。天保13年の西条藩史には水田となり磯浦新田となる。名古屋呂の地名は名古屋の浜と呼ばれるようになる。

名古屋の地名が名古屋野、名護屋と書かれたりして、海に突き出た土地、岬の意味が考えられ。名古屋とは、海に突き出た砂堆で、内側が内湾として湿潤地を形成していて、塩田に開発され、続いて惣開新田と開発された。

内湾の奥まった所は潮汐の干満で徒渉が可能な土地として、干越えと呼んだ。佳字使用で星越えと記述変化する。

30. 瀬戸内海 開国とともに日本に押し寄せた欧米人が使った The Inland Sea を的確にあらわす言葉として、明治初年に江戸時代にあった「瀬戸」「瀬戸内」「内海（うちのうみ）」を駆使して、近代的な地理的概念として地理学の分野で翻訳した地域名である。海上交通と地理思想の発達が広域海域概念として必要となってきたことを物語っている。

それまでは日本人にとっていくつかの灘にすぎなかった海や、八十島（やそしま）、島隠り（しまがくり）、島門（しまと）といった島の多い海域でしかなかった海が、欧米人による汽船での快適な航行につて、体験的に発見された同質性の海域である。

瀬戸内の広域の海域概念は、江戸時代末期には尾道の芸予諸島以西から下関間でであった。明治時代になってその区域を東に拡大して瀬戸内海の言葉が使われだす。しかし、大阪湾を除く淡路島以西である。その後、明治後期になって、現在と同様の紀伊水道、関門海峡、豊後水道に囲まれた区域に固定してきた。

31. 別子ライン 国領川が中央構造線を横切って四国山地から新居浜平野に流れ出る所に架かる生子橋から上流の河又までの約9Kmに及ぶ景勝地。昭和25年10月1日の「愛媛八勝十二景」の十二景に選ばれ、昭和30年11月4日には「愛媛県名勝」に指定されている。昭和33年2月1日には週間読売の「新日本百景」で第5位に入選、昭和60年7月10日には「四国二十選」の第5位に選ばれている。昭和60年7月10日には朝日新聞社と財団法人森林文化協会の「二十一世紀に残したい四国の自然」の第8位に選ばれている。

壮年期山地をV字谷が深くえぐる溪谷は、三波川帯の結晶片岩地帯で、北部は大生院層群の黒色片岩、南部は三縄層群の緑色片岩が侵蝕された雄大な景観をつくる

大正初期に地理学者の志賀重昂が木曾川の中流の岐阜県と愛知県にまたがる景勝地の溪谷を訪ね、ドイツのライン川の風景に似ているところから、日本ラインとなづけた。そのことを真似て、溪谷の景勝地のネーミングとして別子ラインと命名したと考えられる。ライン川のつづりは英語ではRhineであり、オランダ語ではRhinであり、ドイツ語ではRheinであり、フランス語ではRhineで、固有名詞であるのでそのまま書く。Besshi-Lineと英語の線の意味のラインを書いているが、ドイツのシンボリックの川であり、ローレライの景勝地で有名であるのでドイツ語のBesshi-Rheinと書くところであろう。

（新居浜市総合ガイドブックには、ライン川の溪谷美にあやかつて、戦後、角野町時代に町民が世に出すために名付けたとある。）

ライン川とローレライ

ライン川は全長1320kmの国際河川である。スイスのアルプスの雪溶けを源流として、スイス、オーストリア、リヒテンシュタイン、フランス、ドイツ、オランダの6国を流れて北海に至る。ヨーロッパでは父なるライン川、母なるドナウ川と並び称されている。船はスイスのバーゼルまで遡る。古代から水運が盛んで、神聖ローマ帝国以来、物資や文化を運んできた。沿岸にルール工業地帯を形成する。

ドイツ・ツアーで有名なロマンチック街道の旅のメインはライン川下りである。リューデスハイムで遊覧船に乗船する。ブドウ畑がへばりつく狭隘部を下る。ネズミの塔、エーレンフェルス城址、ラインシュタイン城、ライヒエンシュタイン城、ゾーネック城、プハルツ城、シュタールエック城、シェンブル城、そして圧巻のローレライの岩である。「なじかは知らねど心わびて 昔の伝説はそぞろ身にしむ —————」のメロディーが船内に流れて、猫城を見るとその対岸のサント・ゴアで下船する。ローレライの岩は、古くは「ルーレライ」と呼ばれていた。「ルーレ」は「待つ」、「ライ」は「岩」の意味である。人声や歌声のやまびこをおこすので知られていた岩であった。つまりは、舟人たちが心を込めてこの岩に呼びかけると岩がこだまを返す。こだまの返り具合で岩のご機嫌が知れて、この先の旅の安否を占った。

やまびこを待つ妖精の住む岩であった。ドイツ語の詩は、ハインリッヒ・ハイネの作詞である。元詩は、ゲーテの「ラインの詩」に触発されたブレンターノの「創作物語詩ローレ・ライ」である。あらすじは「昔、バッハラッハにローレライという美女が住んでいた。ローレライは多くの求愛を受けたが、彼女が愛していたのは城の側に住む騎士であった。聖職者までが彼女の虜になり、激しい嫉妬心から、彼女を魔女として訴えてしまった。修道院での生活を裁判で言い渡され命拾いをしたローレライは、修道院へ向かう途中、崖の上からライン川を眺めた。すると船に乗った騎士が崖に近づいてくるのが見えた。思わず両手を広げて駆け寄ったローレライは、崖から落ちてライン川の中へ消えていった。」ローレライの岩には歴史がある。崖の上には白と黒のローレライの像が立っている。

日本風景論を表した滋賀重昂は長良川の狭隘部に日本ラインと命名した。それを真似て、角野町は国領川の8 km間に別子ラインと名付けた。しかし、ライン川に由来することを知らず、道路標識にはLineと書いていた。本当のRheinに書き改まったのはごく最近である。

ローレライ

なじかは知らねど心わびて
昔の伝説はそぞろ身にしむ
夢しく暮れゆくラインの流れ
入日に山々あかく栄ゆる

美し少女の巖頭に立ちて
黄金の櫛とり髪のみだれを
梳きつつ口吟ぶ歌の声の
神怪き魔力に魂もまよう

こぎゆく舟びと歌に憧れ
岩根も見やらず仰げばやがて
浪間に沈むるひとも舟も
神怪き魔歌謡うローレライ

※三波川結晶片岩 三波川は、群馬県神流川(カガリ)の支流の三波川にちなんでの命名。結晶とは、熱や圧力により固体の間まで岩をつくっている鉱物が化学変化や結晶構造の変化をしたこと。割れ口に日光をあてるとキラキラと光る。

片岩とは、変成岩のことで、元の岩が地下で熱や圧力を受けて、元の岩とは全く異なったものになった岩。

三波川結晶片岩とは、アジア大陸の東縁の海底に堆積した中生代ジュラ紀(2.13億~1.44億年前)の下部の地層が中部白亜紀の約1億年前頃に地下30kmで域的に高圧変成作用と変形作用を受けて、結晶状の固い岩になったもの。

高圧を受けているため、岩の内部には平行な面構造が発達しており「片理」または「片状構造」と呼ぶ。片理に沿って強弱の違いがあるが、板状、葉片状に割れやすい性質をもっている。

泥質片岩、砂質片岩、珪質片岩、塩基性片岩等の結晶片岩で構成する。泥質片岩は泥岩から、砂質片岩は砂岩から由来したもので、かつては黒色片岩や黒墨片岩と総称していた。

珪質片岩は、化学的に沈殿した潜晶質珪酸とされるチャートから由来したものと考えられ、石英片岩、紅簾石石英片岩等含む。塩基性片岩は、主として海底で生成されたと考えられる玄武岩質の溶岩および凝灰岩等の火山砕屑岩から由来した片岩類の総称。緑簾岩-陽起石片岩、藍閃石片岩、角閃石片岩等、主要構成鉱物で表示されることが多い。

かつては緑色片岩、緑泥片岩、緑れん片岩等と表示されたのも塩基性片岩に該当する。

三波川変成岩類は、関東山地から天竜川地域、紀伊半島を経て、四国中北部を横断し、東九州佐賀関半島に達する延長約700km、最大幅約40km。

結晶片岩帯には鉍山が多い。主に銅鉍山である。中でも別子銅山は世界に名高い大銅山であった。鉍床はたいてい結晶片岩の層に挟まれた形になり、鉍石の主なものは、黄銅鉍と黄鉄鉍の小さな粒がより集まった含銅硫化鉄鉍で、それが塊状になっているのが塊状含銅硫化鉄鉍。塩基性片岩の中に縞のように入っているのが縞状含銅硫化鉄鉍である。黄銅鉍や班銅鉍のように銅分の多い鉍石が塊になって産することは珍しい。結晶片岩の中には輝安鉍も産出した。市の川鉍山は世界最大の輝安鉍の結晶を産した。

32. 王子 現在の惣開小学校の裏山に文政2年正月に王子権現をお祀りした。王子川が連なる沼沢で最大のものを王子淵と呼んでいる。王子山の麓にあるところから住居表示で王子町と命名した。王子幼稚園に名を留める。王子山の前は前山の呼称がある。一宮神社参道の第二鳥居の近くの西側に常夜灯籠があり、正面に王子権現を祀っている。
王子信仰とは、神が化身した聖なる童(王子神)に対する信仰。
33. 呉木 皮のついた木材、山出しの板材のことを樽木(くれき)という。この樽木を伐り出すための幕府直轄の山林のこと。江戸幕府が元禄15年に立川新道の許可をしたことに伴い元禄16年に立川山村、大永山村、東角野村、西角野村、種子川山村、新須賀村を天領にした。
34. 角石原 第1通洞や太平坑道などからの運ばれて捨てられたズリ捨てによって形成された小規模の平坦地。削岩した石なので角ばった石ころが捨てられた。
35. 一本松 ランドマークとして大きな松が集落の上部北側に一本生えていた。
36. 柳谷 カワヤナギが茂っている谷。
37. 馬の背 馬の背中に似た稜線の尾根。中ほどに少したわみをもっている稜線から馬の背中にならえた。
38. 前田 郷土史談話22号(S. 52年5月)に、山田川の下流の王子川は、元は「前川」であったとの報告がある。王子山から王子川なら、前山からは前川となる。前川の湿地帯の土地利用は田圃で、前川地帯の田圃から前田となる。
39. シハス 裏門と大阪屋敷を結ぶ馬路のある尾根が、馬の尾に似た尾根。シハスはシハハスが縮まったと考えられる。シハは、馬毛。ハスは、馬の尾の毛。
40. 辻阪 日照時間が少なく、特に冬期積雪が根雪になって残り、坂道がすべることから。
41. 喜三谷 喜三という者が谷で木炭を焼いていたから。
42. 尾端 一の森の尾根の端に当たることから。
43. 大根戸 東延を元禄期に大根戸と呼んだ。根戸は舗の最も低い所。「大」低さを強調。富鉍帯を地表に投影した呼び名。
44. 日浦 東南に山を控えて日当たりのよくない影地。三ツ森山が南南東に聳える谷間の右岸の影地である。浦通洞の入り口あたりが本来の日浦であるので、日浦登山口は、日浦から上流の左岸で日当たりが良いので「ヒナタ」と勘違いする。
農家の玄関先や納屋の前の日当たりのいい小広場を「ヒノウラ」という。この「ウラ」

は「ウレ」が変形して先端の意味。日の射す先端で日当たりのいい場所となる。

5. その他の地名を考える

- | | |
|----------|----------|
| 1. 燧灘 | 18. 江口 |
| 2. 尻無川 | 19. 新須賀 |
| 3. チチ山 | 20. 元塚 |
| 4. 瓶ヶ森 | 21. 中須賀 |
| 5. 要害 | 22. 渦井川 |
| 6. 白石 | 23. 銚子の滝 |
| 7. 河北山 | 24. 川又 |
| 8. 東新 | 25. 堺筋 |
| 9. 多喜浜 | 26. 金栄 |
| 10. 洪水 | 27. 新居浜 |
| 11. 大生院 | 28. 岩鍋 |
| 12. 清滝 | 29. 旦の上 |
| 13. 敷島 | 30. 篠場 |
| 14. 大島 | 31. 西の土居 |
| 15. 南小松原 | 32. 金子 |
| 16. 久保田 | 33. 新田 |
| 17. 河内 | 34. 滝の宮 |

01. 燧灘 「ひうち」は、狼煙(ノロ)のことであり、古代から伝達手段として使用してきた。一種の灯台の役目もし、瀬戸内海の航海に使用。
新居浜の大島に狼煙台の跡があり、西条市船屋の山に「かがりやとうげ」の地名を残す。氷見も元は、火見であり狼煙の火を見たことからの命名である。
狼煙は、水軍で使用したものではないだろうか。
「なだ」は、島が少なく風が吹けば波が立ち荒れやすい海域。これと反対に、島が多い所は水流が早く、早瀬、瀬戸という。
02. 尻無川 川尻(河口、排水口)の無い川。自らの流によって運搬・堆積した砂等で天井川となって河口部をふさいだり、沿岸流によって運搬・堆積された砂等で河口部をふさいだ川。尻無川は東側の国領川が瀬戸内海に流出する多量の砂が、東から西への沿岸流によって運搬・堆積され河口をふさいだと考えられる。現在の大江工場の所には砂洲ができていた。この砂洲との間が入り江となっていて、天然の港となっていた。この入り江が港として機能するほど大きかったので、大江と呼んだ。この天然の良港があったので、大江の浜に口屋が設けられたと考えられる。
国領川の河口には「青砥尻」の地名がある。河口部がふさがっている形態は、荷内川の河口部で見られる。
03. チチ山 乳山と書かれたりしているが、元々は父山と書く。いつの間にか男性が女性に性転換して女性になってしまった山である。父山に対する母山は笹ヶ峰である。なだらかな笹ヶ峰に対して競り上がったチチ山の山様から見てうなずける。
チチ山も石鎚信仰の対象の山の一つである。石鎚信仰の対象の山は石鎚山、瓶ヶ森、笹ヶ峰がある。

* 笹ヶ峰の笹の字は「竹」と「葉」を組み合わせた文字で「葉」の草冠と木をとつたも

のである。

* 笹ヶ峰に伊予池、土佐池があり、葛籠淵の雨乞い信仰の日月池に当たる。

04. 瓶ヶ森 亀ヶ森と書いていたが、隆起準平原の氷見二千石原に大きなホットホール（甌穴）の瓶壺があるところから瓶壺のある山として瓶ヶ森になった。
朝鮮語のモリは山であり、森の字を当てた。古代において朝鮮半島との交流があったことを示す。堂ヶ森、黒森、高森、一ノ森、二ノ森、三ノ森、三方ヶ森、四辻ノ森、五葉ノ森、明神ヶ森、経座ヶ森、柱ヶ森、餓鬼ヶ森などの山名がある。古代神話も日本海を取り巻く地域に共通性があり一つの文化圏を形成していた。
05. 要害 地の利を得ていることを意味する。要害の地にない、平野の真ただ中にあるのは、国領川の自然堤防上に載っているから、洪水などに対する要害である。
06. 白石 御代島の東側で、新居浜港の赤灯台の北側にある白御影石（大理石岩）の岩礁。この白い石の岩から「白石」の姓がつけられた。
07. 河北山 西条市に続く丘陵を一般に金子山と呼んでいるが、正しくは河北山である。これは東川（金子川）の上流の北河川の北側にある山。金子山とは、この丘陵部の東端の滝の宮公園の第一展望台あたりの山である。テレビ塔と呼んでいるのは、衣笠山である。
08. 東新 新居郡の東部の意。昭和29年、国土地理院によって、周桑平野、西条平野、東新平野、宇摩平野の総称として新居浜平野に統一された。かつて道前平野と呼ばれていた地名はなくなったが、その道前平野は、広くは新居浜平野全体を指し、狭くは周桑平野と西条平野を指していた。
東新の名は、公的には東新学園にとどめている。民間においてもその名称はわずかでしかない。鷲尾勘解治の「地方後策」の完全実施を要求して結成されたのが、東新振興同志会である。ちなみに、道前平野に対応している道後平野は、松山平野の地名となっている。
09. 多喜浜 塩田では海水を花崗岩の砂の上にまいて、天日で水分を蒸発させて、濃度の濃い塩水をつくり、次に石と粘土で造った釜で塩水を煮詰めて塩をつくっていた。煮詰めることを「炊く」ともいい。御飯を炊く場合、米と同量の水を煮詰めて白御飯をつくっている。
塩を生産するのに塩水を「タイタ」浜＝たきはま。
炎天下の作業は過酷であったが、生活の必須品の塩の生産は、西条藩の三白の1つでお金になり、多くの喜びをもたらすものであった。
- 多喜浜 多喜浜は大黒島村、阿島村、郷村、松神子村、垣生村に囲まれた遠浅の海であった。大久貢山、小久貢山は郷村の本帳にある。旧はただ塩浜といい、中ごろには古浜（こはま）と呼び、または西多喜浜と名づく。文化元年(1804)に西の字を省き多喜浜と改める。
しかし、享保18年丑(1733)検地帳に「多喜浜丑五月検地相究者也」また、「塩浜岡畑定免願 丑五月 多喜浜元締 喜四郎」とある。享保18年5月以前に完成した十一浜も含めて多喜浜と命名されたと思われる。
多喜浜の名の由来は、大正12年(1923)に刊行された新居郡誌には、当時藩の普請奉行であった多良尾介之丞の「多」と塩田開発者の喜四郎の「喜」をとり、藩主より多喜浜と命名されたとある。しかも、第二次開発工事が享保17年(1732)・18年(1733)の大飢饉の救い普請として進め、享保18年(1733)に十一浜の東に完成したときである。餓死から救われて多くの喜びを表象して「多喜浜」と命名したと考えられる。

最初は単に「塩浜」と呼んでいたが、新しい塩田が完成して古い方の塩田を「古浜」呼び、新しい塩田は「新浜」と呼んだであろう。新旧を合せた呼び方として「多喜浜」が登場したと考えられる。古浜の東に東分が完成した時期に多喜浜の名称が生まれた。

「塩－浜」→「多喜－浜」から、「塩」すなわち「多喜」をもたらす物との認識がある。海をせき止めて村を生み、その海水を「焚き」「焼き」て「塩」を生むプロセスからして自然の恵みに畏敬の気持ちをもっていたことが伺える。そこには当然のこととして、神の勧請がおこる。

「多喜」は佳名表記でもある。少ないに対する多い、悲しみに対する喜びである。

四多喜浜

多喜浜	十三軒浜・黒島前塩浜・古浜・西浜・西多喜浜とも呼ばれていた
多喜浜東分	三十五軒浜・新浜・東浜・東多喜浜とも呼ばれていた
多喜浜西分	新多喜浜・久貢新田とも呼ばれていた
北浜	新浜・沖浜とも呼ばれていた

10. 洪水 かつて、国領川が洪水となって氾濫したことにもとづいた命名であろう。内宮神社下から角野、泉川の農地を潤す用水が取水されている。

洪水の被害は、扇状地性平地の浸食としてあらわれ、人々の記憶に強くとどまり洪水の地名となった。堰から用水路のレベルで段丘面が確認される。

11. 大生院 往生院正法寺の「往生院」に由来し「大生院」の字を当てる。

12. 清滝 古い国土地理院の5万分の1の地形図には、清水滝とあった。明治39年測量で昭和31年修正測量図まであって、昭和42年資料修正図で消滅している。イワシミズの清水の滝であったものを、中抜き、又は短縮して清滝となったと考えられる。

昭和14年2月号の「改善」のグラビア写真のキャプションに「角野村清水瀧ハイキング」と出ている。元は清水滝であったる

清滝の水量が少なく、岩場に水がかかる形態からの命名であったと思われる。景勝地の滝として水量もあり、見栄えのある滝とするために、南側の谷の水を送水して水量を増やす意見もあるが、元の地名が変えられたことにも起因した見方ではないだろうか。

滝の水が落下する中段に行場があるのも石清水の縁ではないだろうか。魔戸の滝や銚子の滝のように水量が多いと滝つぼが掘られて滝行はできない。滝行するには足場が確保され落下する水圧に耐えられるだけの水量でなければならない。

水量の多い銚子の滝では、正法寺の修験者は滝壺に入り落下する滝の水の飛沫をあびている。落下する水流にて前へ押し出されている。

13. 敷島 崇神天皇・欽明天皇の宮のあった大和の国の磯城郡の地名に由来した吉祥地名。

磯城の宮のある島から大和国の別称、日本国の別称となる。「敷島の」は大和にかか
る枕詞である。「敷島の道」は日本古来の道から和歌道、歌道を指す。

敷島通りは、国土地理院の5万分の1の地形図の明治39年測量で昭和3年修正測量図では、現在の大丸前～登道が建設され、昭和3年修正図では田の上までの現在の形ができあがっている。昭和通りに続く東西の幹線道の完成であり、建設起点から見てその先に大和の国の磯城郡を見たのであろうか。

※ 敷島の最初の表記は596年の元興寺の露盤の名に万葉仮名で書かれた「斯歸斯麻」(シキマ)である。

敷島 映画館に敷島館があった。その後、敷島館の前に大通りが建設され、敷島館にちなんで敷島通りと命名された。

14. 大島 かつて大島と黒島とで大黒島村であった。大島は黒島より大きかったので大島と呼んだ。垣生山、久具山も今は陸つづきになっているが、かつては島であった。垣生山は、沿岸流によって運ばれた砂で繋がった陸繋島と思われる。垣生海岸から2～3筋の砂堆が確認できる。陸繋島になりかけたのを埋め立てたのが御代島であり、工陸繋島と呼ばれる。一方、久具山は、塩田による堤防づくりで陸つづきになった。
垣生山、久具山、黒島、御代島から見ても一番大きな島である。また、燧灘沿岸の島でも一番大きい。
15. 南小松原 国領川の氾濫により形成された自然堤防の砂地は、土地利用されず、自然林として松林が広く形成されていた。松林が広く形成された土地を松原と呼び、密集した松林は生育が悪く背の低い小さな松であった。松原の南半分が南小松原と呼ばれた。
住居表示で消滅したが、労災病院の北側はかつては北小松原と呼ばれた所である。
背の低い松林は、岸の上地区に見られる。
16. 久保田 東川の後背低地と天井川化した尻無川の後背低地によりできた窪地は、後背湿地であり水田として土地利用されたところから、窪田が生活の糧の食料供給の良田として久しく保持されるよう佳字を当てて、久保田となった。
17. 河内 東川と王子川に挟まれた所。
平安中期に後三条天皇の延久年間(1069～1072)に伊予守源頼義が河内国より守護になってこの地に移り住み地名を河内とした。河内寺も再建する。河内寺の創建は天平時代と伝えられているので、河内寺の名称は頼義の再建時の命名と思われる。後に金子一族が 武蔵国から来て村名を河内村から金子村に改めた。
住居表示の河内町は、北が河内で、南が岸の上と呼ばれていた地域である。現在の河内町は金子川と山田川に挟まれた所のように見え、金子川の自然堤防の上が集落となった。山田川は後背湿地の沼沢を連ねている。高知市はもともと川に挟まれて河内でコウチの音を高地→高知と佳字を当てた。大阪平野の河内はカワチで上町台地と生駒山地に挟まれた低地で、大和川を主とする川に挟まれた所である。
18. 江口 東川の河口の土地。(伊能忠敬図では東川を萩生川としている。)
19. 新須賀 国領川の氾濫原の砂州の土地が新しく土地利用された。須賀は氾濫原の砂地。
20. 元塚 塚も須賀であり、尻無川の元の部分に当たる砂州の土地。河口部であるので沿岸流による砂堆も形成された砂地。
21. 中須賀 海浜部の沿岸流による砂堆も形成された砂地。国領川と金子川の間の中ごろに海に突出した砂州が出来たことによる。旧新居浜漁協跡地あたりが海に突出しているのは、旧砂州の痕跡である。
22. 渦井川 国道より約2町の所に泉があって、水が深くどんな日照りのときも、いつも清水をたたえ、水が出るときに渦を巻いたところから命名された。(大生院郷土誌)
23. 銚子の滝 山吹谷にかかっている滝で、滝の落差は約30m。滝口の岩が凹字形をしていて、やや突出し手いるので、まるで鶴亀の長寿をことほぐ銚子の口に非常に似ているので命名された。(大生院郷土誌)
7月下旬の笹ヶ峰の石鎚大権現のお山開きの前日に、正法寺で催される柴灯護摩法要では行者が銚子の滝の滝壺でミソギを行っている。

なお、銚子の滝の上流にはかつて愛媛鉱山があり、銅鉱石を掘り出した関係で水質はよくない。

24. 川又 川が合流した所。川俣、川股の「マタ」が「又」の字に変化した地名。下流から見ると川が分れた所。
25. 堺筋 堺は坂井町に向かう道路の意味。大阪の道路の命名の仕方は東西を「通り」とし南北を「筋」としている。これを真似て、南北の幹線道路に「筋」をつけた。別子銅山の関係で情報や文化が頻繁に入ってきた影響と考えられる。坂井町は泉川村、金子村、中村の境。ちなみに、本町通り、昭和通り、敷島通り、市役所前通り、角野大通りは東西道路である。
26. 金栄 金子小学校の児童数が2000人に余る大規模校であったので、適正な児童数の学校規に編成され、昭和27年度に、西の土居、高木、政枝、滝の宮、坂井の一部を校区として金栄小学校が開校した。金子がいつまでも栄えるようにとの願いをこめて命名した。
27. 新居浜 中村あたりに新しい郡役所が新築したところから「新居」と呼び新居の地先の海岸としての「新居の浜」が縮まって新居浜となり、波が絶え間なく打ち寄せる浜辺である浦に人々の暮らしの拠点の家々がある所から新居浜浦と呼称されてきた。浦は家々がある海のほとりの村。
- ※ 浜は多喜浜に見るように、塩田などのある広い砂浜。大江浜も砂浜である。
 - ※ 津は船の発着する港。
 - ※ 沖は海岸から遠く離れた海。地先漁場の外側の海域をさす。
28. 岩鍋 鉱石の精錬に関係した事例があるが、新居浜では塩を作った所ではないだろうか。塩水を煮詰める鍋に鉄製の鍋を使うと錆びるので、小石を粘土でくっつけた石の鍋を使用した展示が、赤穂市の塩田博物館にある。
- 岩鍋の地は人家から離れたた辺地で清い海水の得られる土地である。塩を煮詰める石鍋は小石を張り詰めているので、君が代の歌詞に見られるように「さざれ石の岩おとなりてー」、小石の集合が岩となって石鍋が岩鍋とも呼ばれた。
- 塩田による製塩より以前の海水を直接煮詰める製法によるのであろう。
29. 旦の上 奈良時代に伊予軍団が設置されていた。今治市桜井町旦、東予市旦の上、新居浜市中萩旦の上の3カ所が設置場所として推定されている。交付された官印と推定される伊予軍団の銅印は土居町天満の八雲神社に保蔵されている。（愛媛県の歴史散歩）
- 旦の上の旦は軍団の団である。熊本市内には旅団が駐在した所に健軍の地名がある。
30. 篠場 新四国第39番霊場の深谷寺は修験道の道場であり、師ノ道場が師ノ場と変わり篠場の地名となった。
31. 西の土居 土居集落の名残を伝える地名である。金栄小学校の西あたりに高築砦(タカヅイトリデ)の岡があり、そこから西に西の土居構えがあり、南東には西の土居構えあった。東の土居構えの遺構が一部残っている。
32. 金子 武蔵国入間郡金子村に本拠をもつ金子頼広が、新居郷の地頭職として弘安5年(1282)に、この地に定着して、もと河内村と称していた村名を金子村に改めた。天文から永禄(1532～1570)の頃、金子山に築城した。頼広から10代目の金子十郎元成は金子新田を開拓した。元成の子の元宅は、天正13年(1585)進攻してきた小早川軍との野々市原での合戦

で戦死した。金子城跡の山麓館の跡に慈眼寺が建てられ、供養塔が建てられ従った武将の墓もある。

33. 新田 金子十郎元成は金子新田を開拓した。新居浜駅前自治会館の敷地内に十郎神社が祀られている。

天正年間(1573~1591)に西条の今在家から塩崎播磨守が新田地区の干拓に来る。万治2年(1659)西条の神戸村から来た塩崎利右衛門、塩崎新右衛門の親子が西新田地区で2町2反5畝を開拓した。現在の泉幼稚園の南側の黒岩の山の土砂を使用した。播磨守が第一次干拓で、塩崎一族が檜木から神戸へと干拓を進め、利右衛門、新右衛門の親子が50年後に第二次干拓と考えられる

34. 滝の宮 岩峰の頂のタケをタキと称するように、滝は岳である。かつて石切り場があり岩がむき出しになっていた。

滝神社のある所。滝の宮町の地名や滝の宮公園に名を留める。滝神社は、言い伝えによると元慶年間(877~885)の創建。山頂の盤座は弥生時代の遺跡である。神社庁から伐採が禁じられ現在の林相を残している。

6. 命名パターン

合成名	神郷=松神子+郷	中萩=中村+萩生
(切継地名)	高田=宇高+田の上	中西=中筋+西連寺
	高津=宇高+沢津	新高橋=新居浜+高津
方位名	相対的に方角を示す地名。あるものから見てその方角の位置に在ることを示す。 東町-西町 東須賀 西原 北新町 宮西 西の谷 西の土居、東川東雲 南小松原-(北小松原) 東浜 東田 東城 北内 西連寺 西泉 西喜光地 西の端 西赤石山-前赤石山-東赤石山 東種川-西種川 西山-(東山) 西河川-北河川 河北山	
位置名	相対的に位置を示す地名。 中須賀 庄内 上ノ名 中ノ名 田の上 城下 岸の上 外山 坂の下 中筋、 中通 上原 岸の下 且の上 上本郷-下本郷 上兜-下兜	
色名	黒島 白浜 黒石	

7. 参考文献

別子開坑二百五十年史話	榎住友本社
地図と地名	山口恵一郎 古今書院
地名の成り立ち	山口恵一郎 徳間書店
地図はさそう	掘 淳一 そしえて
日本の地名がわかる事典	浅野建爾 日本実業出版
日本の地名雑学事典	浅野建爾 日本実業出版
日本の地名・都市名	今尾恵介 日本実業出版
山が楽しくなる地形と地学	広島三朗 山と溪谷社
景観から歴史を読む	足利健亮 NHK出版
日本風景論	志賀重昂 岩波文庫
地名の研究	柳田国男 角川文庫
地名の楽しみ	服部英雄 角川文庫
地図を探偵する	今尾恵介 新潮文庫
地図の遊び方	今尾恵介 新潮文庫

地名の謎	今尾恵介	新潮文庫
日本地図から歴史を読む方法	武光 誠	KAWADE夢文庫
日本地図の楽しい読み方	ロム・インターナショナル編	KAWADE夢文庫
黄金と百足・鉱山民俗学への道	若尾五雄	人文書院
金属と地名	谷川健一	三一書房
青銅の神の足跡	谷川健一	小学館
日本の地名	谷川健一	岩波新書
続・日本の地名	谷川健一	岩波新書
日本の地形	貝塚爽平	岩波新書
絵地図の世界像	応地利明	岩波新書
瀬戸内海の民俗誌	沖浦和光	岩波新書
歌舞伎のキーワード	服部幸雄	岩波新書
日本の地名	藤岡謙二郎	講談社現代新書
地図との対話	中野尊正	講談社現代新書
地図ー遊びからの発想	掘 淳一	講談社現代新書
五万分の一地図	井上英二	中公新書
日本の地名	鏡味完二	角川新書
地名の博物史	谷口研語	PHP新書
地名で読む江戸の町	大石 学	PHP新書
地名で読む京の町	森谷尅久	PHP新書
京都地名の由来を歩く	谷川彰英	ベスト新書
日本山岳伝承の謎	谷 有二	未来社
「モリ」地名と金属伝承ー続日本山岳伝承の謎	谷 有二	未来社
人生の目的	五木寛之	幻冬舎
愛媛の地名	堀内統義	えひめブックス21
松山地名・町名の秘密	土井中照	アトラス出版
地名の研究	柳田國男	講談社学術文庫

8. 地名の二文字化

和同年間に国策として、中国の真似をして地名の二文字化、感じのいい漢字に代える 好字化が起こった。（「私家版日本語文法」井上ひさし 著 新潮文庫 P143）

泉の国→和泉

紀の国→紀伊

9. 言霊信仰(ことだま一一)

言霊はどちらかというと神道の考え方。昔から縁起の悪い言葉とか、ゲンのわるい言葉を避けて、良い言葉を羅列する、並べていく言い方をしていました。これは言葉に霊力があって、それ全体に影響を与えるというものの考え方があった。

「言祝ぐ」という言い回しがありますが、おめでたい言葉を重ねていくことによって、人の幸せを願っていこうというものの考え方です。

万歳は、もとは「千秋万歳(せんずまんざい)」という言葉から来ている。千年も万年もという意味。（「落語的笑のすすめ」桂文珍 著 新潮文庫 P145）

外山県→富山県

福岡県→備中福岡から封入、丘のある土地を佳名で表現した

補陀落（フダラ）→二荒（フタラ→ニッコウ）→日光（ニッコウ）

古代人の言霊思想では、単なる賛美だけでなく、期待とか祈願の冠辞や枕詞もあったと思われる。豊葦原の瑞穂という冠辞なども、言葉を国魂や地霊に言って聞かせるといつた意味もあったと思う。「風土記」に地霊に対するクニボメの呼びかけと考えられる記述がある。地名は、その名のクニタマを負うものという信仰が存在していたらしい。あたかも「誅辞(シヌビゴト)」「寿辞(ヨゴト)」を奉るということは、その奉上者のコトダマを君に寄せることになり、従属の事実の完成がなされたことにもなった。言霊のスミカとしての地名は、それにふさわしい居心地の良いものでなければならなかった。「風土記」のおびただしい地名説話の背景には、和同の「好字嘉名」の官命が一役買っている。（「日本人の言霊思想」豊田国夫 著 講談社学術文庫 P132, P133）

10. おわりに

地名を考察してきてかれこれ4半世紀になる。未解読の地名がまだまだ目白押しで残っているので、これもまたライフワークのテーマである。地名の解読には、地理学的考察、歴史学的考察、民俗学的考察、言語学的考察といろいろな考察方法があるが、難解な地名は解読の手がかりもない状態である。しかし、乱読していたら思わぬところでヒントや回答が得られる。本という形の文化を先人が残してくれて感謝している。他地域の人が書いてくれていて感謝している。こうなると読書も趣味の域を出て、義務かもしれないと思い始めた。